

# 2004~06年干天、2015年冷夏、2020年冷夏、2022~28年2年間と4年間の大凶冷を予測

正村 史朗 (総合科学研究所)

半世紀前にわれわれは「太陽活動の変動の法則」を発見し、それに基づいて1年のずれさえ希である驚くほど正確な「気象の120年周期」を発見した。

太陽活動は、 $\alpha$ 周期(4年で極大6年で極小になる10年周期)と $\beta$ 周期(6年で極大6年で極小になる12年周期)の正副2つの基礎周期によって構成される。そして太陽活動には $\alpha$ 周期型のカーブをとるアルファ期(<1901~1960年> $\pm$ 120年 $\times$ n, 60年周期)と $\beta$ 周期型のカーブをとるベータ期(<1961~2020年> $\pm$ 120年 $\times$ n, 60年周期)が交互に交替するという特色のある120年の、 $\alpha$ 周期と $\beta$ 周期の合成周期が存在する。

この「太陽活動の変動の法則」の発見から、天明天保系の大凶冷群、享保嘉永系の大干ばつ群などの発生が事前に予測可能になった。そして「この大冷害と大干ばつに備えて竹林(天保系はハチク類、享保系はマダケ類)が120年ごとに一齐に開花する」ことを発見した。

ところで「自然科学法則」は「実証」を必要とする。そこで次の諸点について本学会や新聞著書等で予測し発表してきたが、それらはすべて半世紀におよぶ「自然の実験」によって「実証」された。

## 「半世紀にわたる「実証」の経緯」

①アルファ期の最後の周期である1953~54年には太陽活動は極小になり、1956~59年には過去120年来最大級の振幅になり、夫々2年連続と4年連続の天保の大凶冷クラスの大冷害群が発生する(1955年には極小から極大に向い高温豊作となる)ことが予測されたが、それらの時期に偏西風は大きく蛇行してその通りになり「実証」された。  
 ②理論上、1901~1960年のアルファ期には太陽周期は平均10年強であり、その極小期、極大期に偏西風は大きく蛇行して冷夏が多く発生し、ベータ期に入った1961年からは太陽周期は12年弱に長くなり、チベット高層高気圧が発達し偏西風が北上して干ばつが発生することが比較的多くなるのであるが、事実1961年からは太陽周期は平均12年弱に長くなり、干ばつの発生が比較的多くなるなどその通り経過しつつあり「実証」されてきた。

③ベータ期の最初の周期の1971~73年には太陽活動は極大から極小に向い、その下降曲線はかなり珍しい段落のあるカーブを描き、この段落のある1971~73年に享保、嘉永クラスの3年間連続の大干ばつ群が発生することが予測されたが、事実、その通り経過し、それらが「実証」された。なお予測通り全国で竹林(マダケ類)が一齐に開花した。

④1993~94年には太陽活動が極大から極小へ段落を描いた後、大気大環流は南北に蛇行し、冷夏、干ばつなどの極端な気候が発生することが予測されたが、1993年が冷夏になり、1994年が干天になり、それらが「実証」された。

⑤1997~98年の太陽活動の極小から上昇途中に干ばつと冷夏が発生することが予測されたが、1997年が干天になり、1998年が冷夏になり、それらが「実証」された。

## 「今後30年間の予測」

⑥直近では2004~2006年にチベット高層高気圧が発達し、偏西風が北上して、この間に2年ないし3年の干天の発生が予測される。

⑦2015年に偏西風が大きく蛇行し冷夏になる。

⑧2020年に偏西風が大きく蛇行し冷夏になる。

⑨現在のベータ期は2020年で終り、2021年からアルファ期に移行するので、太陽活動周期はそれまでの平均12年弱から10年強に代わり短くなる。その最初の太陽活動周期の振幅は180~200の最大級になり、この最初の周期に、天明系の大凶冷群

(2022~23年に太陽活動は極小期になり偏西風は大きく蛇行して2年間連続の大冷夏が発生し、2024年の太陽活動の上昇期にチベット高層高気圧が北偏し1年間の暑夏が発生し、2025~28年に太陽活動は極大期になり偏西風は大きく蛇行して4年間連続の大冷夏)が発生する。このときには、竹林(ハチク類)が日本全国で全面的に一齐に開花する。飢饉(大凶冷や干ばつ)に際し竹が120年ごとに開花するという古来からの伝承は真実だったのである。